

私を堕とせるのはただ一人？いや、こ

からが恋人だし！

【第6話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

柊千咲：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：モデル

飯田早苗：女優

スカウトマン

監督

○ 飯田宅・寝室（夜）

ベッドに寝転がっている2人。

柊 千咲、飯田早苗にきよとんした表情を向ける。

千咲「えっと、どういう」

早苗「唇」

千咲「あ、あれはその……気持ちがバグつてたの！　お、推しの女優に迫られるわたしの気持ちにもなつてください！」

早苗「ふふっ、あははっ！……なにその言い訳、面白いわね！　本当に距離感壊れてるわよ柊」

早苗、笑う。

千咲「笑つた……いつもなら睨んでたでしょ」

早苗「そうね」

千咲「まあ、過去のトラウマなんじやないかな。だからときどきこれでいいのかって迷うけど、嘘の気持ちで接するのは友達じやない。優しさで嘘をつくってことはあるかもしんないけど……」

早苗 「ふーん」

早苗、顔にかかつた髪をかきあげる。

早苗 「彩夏と喧嘩した理由は、彩夏があなたに肉体関係を求めたから。違う？」

千咲 「あ、うん。てか普通にバレてるし」

早苗 「その時、柊が拒絶の意思を示せばよかつたんじゃない？ あなたの意思是お友達だつたのだから」

千咲、はつとする。

千咲 「あ、そういえば」

早苗 「……いえ、それは間違いなく柊の優しさよ」

千咲 「そう、なのかな？」

早苗 「きょう気になつてLINEで彩夏に聞いたの、柊の過去を。そのお医者さんへのあこがれが今でも残つてるから、あなたといふ優しい人間ができた。知つてる？ 柊、あたしが何を言つてもあたしを嫌わなかつたのよ。怖がつてはいたようだけど」

千咲 「そう、だね」

早苗「柊の場合、最初から怒ってないでしょ
う」

千咲M「そう、なのかな？？」

早苗「おやすみなさい、柊」

早苗、ゆっくり目を閉じる。

○女子高・校門（朝）

早苗と千咲、手をつないで歩いている。

校門をくぐろうとした時、女が2人に
近づいてくる。

スカウトマン「あのすみません、わたしはこ
ういうものなのですが」

女、千咲に名刺を差し出す。

千咲「え、何これ」

早苗「スカウトよ。ようやく来てくれたわね」
周りがざわざわしている。

スカウトマン「聞いていた通りお顔が似てい
ます！ 体系もグッド。これなら主演がつ
とまります！」

千咲M「女じやなかつたらセクハラじやない

これ？」

○ 同・3の3教室（朝）

白石彩夏「ええええい 千咲が映画の主演に
スカウトされたあああい」

神谷里見「お、おま、おま、すげえな」

杉園愛梨「すごい……」

3人、驚く。

クラス中が千咲の方を見てざわざわする。

早苗「主人公の妹役がどうしても決まらなか
つたから困っていたのよね。そこで柊を使
えばいいとひらめいて、あたしからスカウ
トマンに連絡するよう言つておいたの」

里見「八百長じやねえかあおえ！ つてか、
連絡とればいいのに、めんどくせええおえ
！」

彩夏「スカウトに八百長つてあるの？」

早苗「昨日ベッドで、顔が似てるって気づい
て。触つてみて思つたけど、胸の大きさと

質感もグッド。キスの所作も素質があつた

わ」

彩夏「は？？」

千咲「しれっとそのことバラすな！」

早苗「だつて、恋人だもの」

彩夏、表情から色が抜ける。

千咲「恋人でもバラさないよ！……ああもう！これは運よく主演がいたから、連絡はスムーズに済みそうつてことで考え中つでした！」

千咲、早苗を勢いよく手で指し示す。

早苗「というわけだから、これを読みなさい」

早苗、1冊の本を渡す。

千咲「これが原作つてことね」

千咲、本を受け取る。

○ 同

T 「昼休み」

5人、千咲の机の近くに集まっている。

彩夏

千咲、早苗をじっと見つめる。

千咲「早苗ちゃん、これ読んだんだけどさ……
…ベッドシーンあるんだけど！」

千咲、本のページを指さして早苗に見
せる。

彩夏「は？」

早苗「ええ、そうよ」

早苗、しれっと言い放つ。

千咲「しかもこれ、恋人が妹で苦悩するって
話で」

彩夏「そうなの？　ってことは、さつき千咲、
妹役でつて……え、え？」

彩夏、呆然とする。

彩夏「百合……映画？」

早苗「ええ、そうよ。終ならそういう演技得
意かと思つてね、少しのトレーニングでな
んとかなるかと」

千咲「恥ずかしいわ！」

彩夏「あ……ふわああああ……うそだあ……」

彩夏、表情から色が抜け、膝から崩れ

落ち、音を立てて床に倒れる。

里見「彩夏死んだぞおい！ 早苗お前、とどめさすなよおえ！」

愛梨「だ、大丈夫？ 彩夏ちゃん」

里見と愛梨、彩夏を抱き起こす。

千咲「こ、これは断つてもいいよね？」

千咲、すぐるような視線を早苗に向ける。

早苗「柊。あたしはね、女優の仕事に誇りを持つているの」

早苗、真面目な表情。

千咲「まあ、早苗ちゃんはすごく厳格な感じあるし、イメージ通りかな」

早苗「今回の映画は小規模だけど、そんなの関係ない。絶対に手を抜きたくないつて思つていいわ」

千咲「うん」

早苗「あたしに似た綺麗な顔に、ベッドシーヌ適正。やつとの思いで見つけた適任。だから、柊にお願いしたいの」

早苗、千咲に頭を下げる。

千咲「わ、わたしにつとまるの？」

早苗「あたしがサポートする。撮影期間も、エロ映画ということで万人受けしないし、知名度もマイナーな映画だから、1ヶ月ちょっとで済むわ」

千咲M「思いつきりエロ映画って言つてるんですけど……」

早苗「大丈夫、声優じやないし。もし何か不利益が生じたら、あたしがすべて責任を取るわ」

千咲「……そんなに熱意向けられたら断れないよ。わかった」

早苗「ありがとう」

千咲「だけど！ ベッドシーン適正つて恥ずかしいからやめてっ！」

彩夏、起き上がる。

彩夏「が、がんばってきて」

千咲「あ、彩夏のこと捨てたわけじやないから！ 友達！」

彩夏、にこつと笑う。

彩夏「嬉しい」

○撮影場所・ベッド

たくさんのスタッフがいる。

千咲N「それから、見よう見まねでがんばつた。予想通りぎこちないと言われたが、早苗ちゃんのサポートもあってなんとかなつた」

千咲と早苗、全裸になつてベッドシーンの撮影中。

千咲M「うわあ来たベッドシーン！ しかも本番で！ ええい、もうどうにでもなれ！」

早苗「サラちゃんが妹でも……わたしはサラちゃんのことが好きなの！」

千咲「あ、あたしもユイちゃんのことが」

早苗、千咲に口づけし、千咲の陰部に指を入れる。

千咲「あんっ！ いつ！」

千咲M「やつつつば推しにガチで犯されて

る！あ、いやいや！これは演技これは

演技つ！」

そう言いながら、千咲、顔が赤くなる。

早苗「好き！ 好きなのっ！」

千咲「んっ！ ああっ！ イク！」

千咲、ビクビク震える。

千咲「き、気持ちいい！ あんっ！ もつと

！」

監督「はいカット！」

2人とスタッフたち、監督の方を向く。

監督「飯田は…まあオッケー。柊は、喘ぎ声と表情の演技、イクの声は完璧だけどセリフが片言だ」

千咲「はあ、はあ、すみません…」

監督「いや、そんな落ち込むな。この映画は濡れ場が大きなみどころであり、山場なんだ。その演技が光っていれば観客を魅了させられる。それが完璧だった今のは、捨てるにはもったいない。いや、よく素人からここまで上達したもんだ」

千咲 「ありがとうございます……」

千咲 M 「嫌われたくないのが理由で本心隠す
ことが多かったから、そこで身についたの
かなあ……」

と、悲しそうにつぶやく千咲。

千咲と早苗、服を着て休憩場所まで移
動。

早苗 「嘘でしょ、柊」

千咲 「何？」

早苗 「喘ぎセリフにそこまで細かい指定がな
かつたとはいえ、完璧って言われるなんて。
柊、演技の才能あるわよ。愛梨はモデルだ
からそっちも考えたけど、柊にして正解だ
つたわ」

千咲 「嬉しいけど、AV女優って言われてる
気がしてなんか喜べない……」

と、複雑な表情で言う千咲。

千咲 「え。でも、早苗ちゃんもよかつたんじ

や」

早苗 「あたしは、まあまあオッケーよ。まあ

まあオツケーと完璧、全然違うわよ。あたしはちょっと有名ってだけだから、そんな

あたしに気づくなんて、格、相当なオタク

ね」

千咲「そうかな？」

早苗「そうよ」

早苗の言葉を聞き、千咲、頬を赤らめて視線を逸らす。

千咲M「やば……言わないでおこう」

○女子高・中庭（朝）

綺麗な花が咲いている。

千咲N「そして、約1ヶ月後」

○同・3の3教室（朝）

千咲たち5人、千咲の机の近くに集まっている。

千咲「めつめつちや疲れた……もう無理」

早苗「感謝するわ、柊」

千咲「なんか、彩夏死んだみたいになつてて

「ごめん」

彩夏 「はは……」

そう言いながら彩夏、乾いた笑い。

早苗「彩夏。あたし、柊と恋人になつてみて、
柊の優しさがじゅうぶんわかつた」

千咲「え？ なつてみて？ ジヤあまさか……」

「嘘だつたの……？」

早苗「ごめんなさい。でも、どうしても、彩
夏から柊がどう見えているのか知りたかつ
た。だから、本気で恋人になる必要があつ
た」

千咲「あ、そういうこと……いやいや何して
んの？ そまだとしてもそんなのありえない
いから！ 略奪とか！」

早苗「なに、付き合っているの？」

千咲「それは違うからっ！」

早苗「撮影がない時間も、募金をしたり、老
人の荷物を持つたり、あたしを慰めてくれ
たり」

彩夏「慰めるって、どういう？」

早苗 「ただなでてもらつただけよ」

彩夏 「どこを」

早苗 「頭」

彩夏 「ほつ⋮⋮」

そう言いながら彩夏、胸をなでおろす。

早苗 「里見と愛梨も、あたしのために仕込みしてくれて、ありがとう」

里見 「バレてたのかよおおえ！」

千咲 M 「あの女の子は仕込みじやなかつたん

だ、まあそりやそうか」

早苗 「柊はじゅうぶん優しいわ。だから、柊。
いえ⋮⋮千咲」

早苗、千咲から視線を逸らしながらぼ
そぼそ喋る。

千咲 M 「おおおお！ あの早苗ちゃんがわた
しを下の名前で呼んだああああ！ 推しの
女優つて考えると超嬉しいんですけど！」

早苗 「お、お、おとも、だち⋮⋮」

彩夏 「おお？ デレ？ 早苗のデレ？」

彩夏、興味津々といった目で早苗を見

る。

早苗「友達くらいだったら、許してあげてもいいわ！ けど、調子に乗らないでよね！」

ああ、もう！」

早苗、頬を赤らめ、恥ずかしそうにずかずかと歩いて教室から出る。

彩夏、くすりと笑う。

彩夏「もう。素直じゃないなあ早苗は」

千咲「そうかな？ 素直に見えたけど」

彩夏「うそ、そうなの？」

千咲「うん」

千咲、にこにこしている。

千咲「彩夏！」

千咲、彩夏をぎゅっと抱きしめる。

千咲「ごめんね、なんかいろいろと」

彩夏「もう……」

里見M「千咲って早苗が推しなんだよな。千

咲が、推しと……」

里見、千咲を見つめ、そつと自分の胸に触れる。

○ 同・下駄箱

少し夕方になりかけている時間。

千咲と里見、出くわす。

里見「よお。千咲の推しつて、早苗以外にいんのか？」

千咲M「やっぱ、里見ちゃん相手がいちばん、男趣味言いやすくてすつごい落ち着く」

千咲、笑顔になる。

千咲「かんきち」

里見「誰だそれ？」

千咲、スマホの画面をつけて検索エンジンを開き、検索する。

里見にスマホの画面を見せる。

里見「かっこいいな」

千咲「うんうん！　かっこいい俳優なの！」

けど、制作発表でやらかしてね。生配信じやなかつたからよかつたんだけど、そのエピソードが面白くて何回も見返してるの」
里見「そうなのか、ちゃんと男の推しもいる

んだな」

千咲「お、男の推しくらいいるつてば！」

千咲、動搖している。

千咲「里見ちゃんといふと、すつごい落ち着

く」

里見「お、おう。嬉しいぜ」

千咲「彩夏はわたしの恋人狙つてるし、早苗ちゃんはダブル厳しい委員長で推しだから感情ぐちやぐちやなるし」

千咲M「それに愛梨ちゃんとは、わたしの心が一時的に壊れてたとはいえんなこと⋮⋮彩夏がいるのによくな」

千咲、真顔になつた里見を見る。

千咲「愛梨ちゃんとは、別になんでもないか。友達ではあるけど。とにかく、里見ちゃんが一番⋮⋮」

里見「そ、そつか！ 嬉しい！」

里見、嬉しそうに千咲の手を取る。

里見「千咲見るとたまちやん

里見「な、なあ⋮⋮早苗との、セ⋮⋮ど、ど

うだつたんだ」

里見、恥ずかしそうに言葉を絞り出す。

千咲「ふえっ！」

千咲、頬を赤くて顔をひきつらせる。

千咲「そそそれは演技だから！ 演技であつて気持ちよくなんてなかつたから！」

里見「つ！」

里見、千咲の手を離して自分の胸を押さえる。

里見M「な、なんだ、これ。変な感じ……」

千咲「里見ちゃん？」

里見M「なんで、苦しいんだ？ 苦しいのか

？ 千咲のこと嫌いじやないはずなのに。

こんな変だぜ」

千咲「里見ちゃん、だいじょうぶ？」

千咲、里見の頭をなでなでする。

里見M「いや、勘違いだ。好きな友達になでられて心が温まる。うれしい」

里見、ほんわかとした笑顔になる。

千咲「里見ちゃんの笑顔、すつごいかわいい

ね
二

里見「へあつ！」
お、
おう！
あたしも嬉し

○白石宅・彩夏の部屋（夜）

彩夏、机に向かつて宿題をしている。

彩夏「早苗が千咲と言つちなことを……」

つと見つめる。

自分の股に手を伸ばし、頬を赤らめる。
千咲の裸を妄想する。

彩夏「んっ、千咲、千咲っ…好き、好き、
好きいっ！ 千咲のこと、想つて、イク、
イク…イクっ！」

彩夏、ビクンと震える。

○ 杉園宅・愛梨の部屋（夜）

愛梨、吊るされていく服を見つめる。

愛梨 「わたしと千咲ちゃん、互いに、どう思

つてるんだろ」

○ 柏木宅・寝室（夜）

部屋に1人つきりの千咲、布団の中で服を脱ぎ、全裸になつて胸と股を触つて喘いでいる。

※ ※ ※

（フラツシユ）

彩夏、愛梨、早苗、それぞれとのセックス。

※ ※ ※

千咲「こんな、こんな恥ずかしい恰好でつゝ：イク、イク、イク、イク、イク：：：氣持ちい！ イク！」

千咲、敷布団に勢いよく潮吹きする。

千咲「あああああああーんんっ！」

千咲、ぐつたりとする。

千咲「こ、こんなん嘘だつてばあ：：：ぜ、ぜつたい嘘だから！」

千咲、恥ずかしそうに顔を隠す。